

2021年3月16日

プレスリリース
PRESS RELEASE

KOTARO NUKAGA

様々な再生プロジェクトを手がけた田窪恭治が見せる「風景芸術」の世界



Kyoji Takubo, *Camélia 2021-#10, 2021*, ©Kyoji Takubo

ネチア・ビエンナーレに日本館代表として参加、同シリーズを発表します。1987年に世田谷美術館で公開制作された《日常一時間の層へI・II》は、自宅のアトリエを再構成した作品で、作品領域は建築にまで拡張していきます。

KOTARO NUKAGA では、田窪恭治個展「Camélia」を2021年4月17日（土）から5月22日（土）まで開催します。今回の個展では、ヤブツバキをダイナミックに表現した切り紙絵13点を発表いたします。
※小林万里子「オーバーストーリー」を同時開催致します。

田窪恭治は、多摩美術大学絵画科在学中に開催した初個展「イメージ裁判」（1971）で、ポストモンの派世代を代表するアーティストとして注目を集めました。その後、表現の対象に身体的なアクションの軌跡を写しとった《OBELISK》（1979）などを経て、《巨船アルゴ》（1983）に代表される、廃材を用いたアッサンブラージュへ移行、1984年にはヴェ

その後の田窪のターニングポイントとも言える《絶対現場 1987》は、再開発により取り壊される木造住宅2棟を梁と柱を残して丁寧に解体し、床面に新たにガラス板を張って来訪者がその上を歩いて体験したのちに全てが解体される作品で、日常風景から姿を消した後も、その記憶は写真家の安斎重男によりアーカイヴとして留められました。これは、建築家の鈴木了二と安斎との協働作業によるもので、その後田窪の代名詞となる再生プロジェクトにもつながっていきます。時を同じくして訪れたフランスのノルマンディー地方で廃墟寸前の礼拝堂に惹かれ、11年がかりの再生プロジェクトを指揮することに。言語や文化の壁を乗り越えながら、資金調達から礼拝堂の再生作業、壁画制作まで、地域の人々と協働して作業を続け1999年に完成を迎えます。見事に再生を果たし村人たちに愛された礼拝堂再生プロジェクトの功績を高く認められ、フランス政府から芸術文化勲章オフィシエを授与されます。

帰国後の2000年には香川県金刀比羅宮の文化顧問に就任、琴平山再生計画に着手。2004年に大遷座祭を終えた後、白書院の襖一面にヤブツバキの花を力強いタッチで描くとともに、カフェ・レストラン「神椿」の建築デザインと壁画制作を手掛け、歴史ある土地の持つ生命力を圧倒的なスケールで表現してみせるなど、現在も精力的に制作活動を続けています。人間が他の生物に敬意を払って共存しながら、他の要素を取り入れたり組み換えることで立ち現れる新たな風景、つまり「風景芸術」を生み出すことで、既存の世界と一見変わらぬようであり、全ての生物が豊かに暮らせる総合的な世界が完成する、と田窪は考えます。「風景芸術」は、作家が制作を終えた後も、表現の現場という役割を担い存続していくのです。

椿の切り紙絵

「光」と「色」に関する人類共通の興味は、特にニュートンの「光学」とゲーテの「色彩論」を経て、近代絵画以降大きな表現の要素となりました。ドラクロワやターナー、マネやモネの新しい絵画の表現方法、そしてセザンヌやマチスやモンドリアンなど、独自の「色」に対する表現がありました。

現在では、さまざまな技術革新とともに「色」から「光」へ、あるいは「色」と「光」を総合的に取り入れた方法が一般的になってきましたが、特にマチスが、その後半生で多く制作した色紙を切って貼り付けた「切り紙絵」の手法と、最晩年の《ロザリオ礼拝堂》の色ガラスを透した光が室内に入り、床や壁（タイル画）、天井などに反射して現れる色と光のハーモニーによる表現に影響を受けた私は私自身の「風景芸術」を実施するために、フランスの《林檎の礼拝堂》や金刀比羅宮の《神椿》から2017年に完成した聖心女子大学の自然石モザイクによる《Le Pommier d' or（黄金の林檎）》を作りました。これらの作品から特定の風景の本質的なイメージをそれぞれ「林檎」や「ヤブツバキ」「黄金の林檎」に見出した私は現在さらに新たな「風景芸術（註）」に向けて進み始めています。

今回の《椿の切り紙絵》は、私がこれから始める「風景芸術」の最初のイメージなのです。

田窪恭治

註：「作家が居なくなった未来においても生き続ける表現の現場こそ、私が目指す『風景芸術』なのだ」

田窪恭治『表現の現場』講談社現代新書、2003年

今回発表されるのは、ヤブツバキをモチーフに描いた新作の切り紙絵のシリーズです。琴平山再生プロジェクトで訪れた、温暖な気候となだらかな稜線の小島が浮かぶ瀬戸内海ならではの穏やかな風土。それと呼応するようなヤブツバキの凛とした佇まいからこの土地の性格を読み取り、「まさに有るが如き花」だと感じ、とても大切な素材になったといいます。特徴的なセピアカラーのドローイングや天然石を用いたモザイク作品など、素材や手法を変えながら田窪作品に繰り返し登場するモチーフです。特別な思いの込められたヤブツバキが、田窪が心新たに取り組む「風景芸術」の幕開けを鮮やかに彩ります。ぜひご覧ください。

■開催概要

田窪恭治「Camélia」

会期：2021年4月17日(土) – 5月22日(土)

開廊時間：11:00–18:00 (火-土) ※日月祝休廊

※国や自治体の要請等により、日程や内容が変更になる可能性があります。

■会場 KOTARO NUKAGA

〒140-0002 東京都品川区東品川1-33-10 TERRADA Art Complex 3F

アクセス：東京臨海高速鉄道りんかい線「天王洲アイル駅」から徒歩約8分

東京モノレール羽田空港線「天王洲アイル駅」から徒歩約10分

京急本線「新馬場駅」から徒歩約8分

■アーティスト

田窪恭治 Kyoji Takubo

1949年 愛媛県生まれ、千葉県在住。多摩美術大学絵画科在学中の1971年、東京で初の個展「イメージ裁判」を開催。自らの身体行為を中心とするイベント性の強い作品を発表し、ポストモンの派世代を代表するアーティストとして注目を浴びる。1980年代には廃材を使ったアッサンブラージュを制作し、1984年ヴェネチア・ビエンナーレに日本館代表として参加。その後、鈴木了二、安齊重男との協働プロジェクト《絶対現場 1987》に見られるような、制作プロセスや場の記憶を共有することで作品を立ち上げる試みを展開した。1989年、フランスのノルマンディー地方に一家で移住し、廃墟寸前だった礼拝堂の再生プロジェクトに11年がかりで取り組む。地元の人々に親しまれる「林檎の礼拝堂」完成後、フランス政府から芸術文化勲章オフィシエを授与された。帰国後は香川県金刀比羅宮にて「琴平山再生計画」を実施、聖心女子大グローバルプラザエントランスのモザイク壁画を制作、2021年3月開業のオーベルジュ、THE HIRAMATSU 軽井沢 御代田に様々な植物を描いた絵画作品を多数提供するなど、作家がいなくなった後も表現の現場として生き続ける「風景芸術」を生み出している。東京都現代美術館、愛媛県美術館、大原美術館など各地で個展を開催。作品は大阪国立国際美術館、愛媛県美術館など日本の近現代美術館を中心に、多数のパブリックコレクションに収蔵されている。多摩美術大学芸術学科客員教授、聖心女子大学グローバル共生研究所招聘研究員。

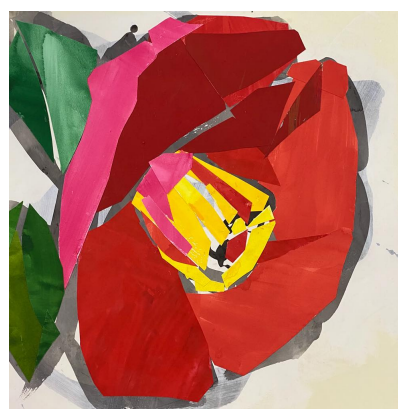
■作品



Kyoji Takubo, *Camélia 2021-#1*, 2021, ©Kyoji Takubo



Kyoji Takubo, *Camélia 2021-#7*, 2021, ©Kyoji Takubo



Kyoji Takubo, *Camélia 2021-#12*, 2021, ©Kyoji Takubo

■お問合せ

KOTARO NUKAGA 担当：脇屋、奥山

EMAIL : info@kotaronukaga.com TEL : 03-6433-1247 FAX : 03-6433-1257 www.kotaronukaga.com